

## 前文 さがすより創ることを考えよう

—みんなの力を結集できるか—

### <まず、何をしますか>

学級なりクラブなりで、何かの機会に劇を上演しようと決まった時、皆さんは、まず何をしますか。おそらく、どんな劇にしようかとじっくり考える前に、とりあえず脚本をさがしに、図書館なり書店なりに足を向けるでしょう。そうです。それが最も一般的な姿です。

でも、多くの脚本集に目を通して、これならいいと思える脚本はなかなか見つからないでしょう。普段の生活の中でのように、「ああ、これが要るな、これがほしいな」と思い、近くのスーパーに行って、求めるものを手に入れる時のようなわけには行かないのが普通です。劇をやろうと思い立って、一度でも脚本を捜してみた人には、きっとそういう経験があると思います。

それも当たり前です。劇の脚本を選ぶには、とても複雑で面倒な条件があるからです。毎日の食料や日用品のような、ごく日常的な買い物は別として、ちょっと金目な買い物、例えば、スーツのようなものを考えてみましょう。お金が有り余っている人ならともかく、われわれ庶民には、スーツ1着買うにしても、いろいろと考えなければならぬことがたくさんあります。これから買おうとしているスーツは、なぜ必要なのか、どういう時に着るのか、よそ行き用か、それとも普段着か、色はどんな色がいいか、どんな柄にするか、サイズはどうか、それに値段はいくらか、などなどを考えると、なかなか決めることができません。礼服なら礼服と、一応の基準があるものなら、それはそれで、その基準に合うようにすればいいのですが、普段用で、それもちょっとオシャレを試してみようなどというときには、ほんとに迷ってしまいます。

### <スーツと脚本はちがう>

でも、スーツならまだまだ簡単です。なぜなら、ちょっと大きい店なら、サイズ別に並べてありますし、色も柄も、一目で識別することができます。そして、一応これならと思うものが見つかったら、試着も短時間でできます。もっとも、試着し

たときにこれならいいと判断して買入れても、長いあいだ着ているうちに、どうも失敗したなど思うようなこともままあるものです。そして、そういうスーツは、けっきょく着られることもなく、洋服筆筒の中にしまいこまれて、眠り続けることになってしまいます。皆さんには、そういう経験はありませんか。

スーツの場合は、それでいいとしても、劇の場合は、そうはいきません。上演する側の条件は、ものすごく多岐多様で、しかも絶対的なものが多いのです。例えば、まず第一に人数、これは、かなり重要な条件です。それに、与えられた時間や演ずるための舞台の大きさや設備も、ちょっと動かすことのできない条件になるでしょう。そんなことを考えると、それだけでもう、どうしたらよいかわからなくなってしまいます。

そのうえ、もっともっと大変なことがあります。それは、脚本の内容やよさは、読んでみなければわからないということです。スーツなら、前にも書いたように、一目見て色や柄がわかり、試着も簡単にできますが、脚本の場合はそうはいきません。それなりに時間をかけて一通り読んでみないことにはどうにもなりません。ですから、大抵の場合、まず人数はどうか、上演時間はどのくらいか、などというところから、ふるいにかけてみます。そして、これならどうにかこちらの都合に合いそうだというものに目を通すことになります。

でも、ここまででもなかなか厄介なのに、劇にはいろいろな種類（ジャンル）があり、脚本にもいろいろなものがあって、しかも、洋服を売る店のように、ちゃんと分けて並べられていません。脚本集というものは、おもに作者の個人集として出版されていて、ジャンル別というより、作者別にできています。もっとも、小中学校向きものは、学芸会を意識してか、学年別に編集されていて、取り上げようという先生や生徒児童に便利なようにできていますし、登場人物の人数や上演時間などが一覧になっているものもあります。高校向きのもも、ころころは、高校演劇が盛んになった状況を受けて、高校演劇向きの脚本集などが出版されるようになってはきましたが、これとても、そうそう簡単に見つかるようにはできていません。スーツとちがって、とにかく時間をかけて一通り読んでみないことには、内容はわからないのです。

#### <現状はどうなっているか>

わたし自身、中学については20年以上、高校についてもここ数年、長野県の飯

田・下伊那地方の合同発表会を、一応、講師という立場で見せてもらっていますが、参加する人たちにとっていちばん困難なことは、実は脚本選択だということがわかってきました。毎年毎年、見せてもらっている舞台のうち、「いい脚本を見つけたな、ぴったりだな」と思えるものは、せいぜい10校に1校、多く見ても、数校に1校あるかなしかです。しかも、ただそれだけならまだいいのですが、ひどいになると、元の脚本に勝手に手を加えて、自分たちに都合のいいように書き直している例もまれではありません。例えば、人数を減らしたり、男の役を女の役に変えたり、それはもう、どうしようもないくらいのことを平気でやっているのです。しかも、そういうのに限って、作者への断り（上演許可をもらう）などということは一切やってありません。高校演劇の世界では、発表会に参加するには、作者の上演許可があることが条件になっているようですから、さすがに無許可で上演することはなくなっているようですが、それでも、許可をもらった後で書き替えるということは結構行われているようです。

もともと、日本という国は、著作権というものについては、きわめてルーズで、小中学校の先生などというものは（元同僚の悪口は言いたくありませんが）、そういうもの（著作権法）があるということさえ知らないと言ってもいいほどです。義務教育だから、学校でやることだから、すべては無料でいいとでも考えているのでしょうか。しかし、たとえ無料にしても、著作権は著作権です。作者の許可もなく、黙って上演していいということにはなりません。現在出版されているほとんどの脚本集には、必ずと言っていいほど末尾に「上演する場合は必ず作者の許可（または了解）を得てからにしてください」と書いてあるにもかかわらず、平気で無断上演が行われているようです。

これはずっと前の話ですが、学芸会が盛んに行われていたころ、上演したいが許可してほしいとか、上演しましたのでよろしくとかいうような通知が来ることはほとんどありませんでした。実際、脚本集に名を連ねている仲間に聞いてもみても、そういう上演許可を求めてくるのは、せいぜい10回に1回だろう、もしかすると100回に1回かもしれない。

だから、1通の許可願いが来たら、それは全国の100か所で上演されていると思ってもいい、というような話も出たくらいです。

事実、それくらいかもしれません。いやはや、まったく困ったものです。

### <いちばん肝心なこと>

さて、話を元に戻しましょう。

とにかく、たくさんの脚本集を山と積んで、それを読みあさり（ひどい先生になると、自分は一つも読まないで、全部生徒任せにしてさがさせるようなこともあるようですが）、その結果見つけたもので、なんとか折り合いをつけて最終的に上演脚本を決め、それで練習を始めることになるわけですが、こういう場合、最も大切なこと、つまり、内容がほとんど二の次になっていることです。1つの脚本を取り上げるのに、他にないからこれにするか、というのと、是非これをやりたい、というのでは大違いです。しょうがないから選んだというのでは、練習するのにも熱が入りません。ただ上手にやってみんなに誉められたいというだけでは、うまくできそうもなくなると、がんばろうという気持ちもわいてきません。先生のほうも、うまくいかなければ、お前たちが選んだじゃないか、ということになって、投げ出してしまうことになりそうです。これでは、せっかくの教育のチャンスが、何の役にも立たず、まったくの無駄になってしまいます。あるいは、かえってマイナスになるかもしれません。もったいないことです。

内容のことで言えば、中学生や高校生が取り上げる脚本の中に、ほんとうにその内容がわかっているのか、というのにも、ときどきお目にかかります。このごろ流行りの作家のものを、さもわかっているような顔をして上演して見せてくれるのですが、これが、どうにも我慢できないような芝居になっているのです。何か変わったもの、目新しいもの、あるいは自分たちにもこういうものができるんだ、と思って取り上げるのでしょうか、それが自分たちのほんとうに言いたいことを代弁してくれるものとして取り上げているのだとはどうしても思えません。作者の願い、脚本のねらいなどは、まったく無視されて、自分たちの気に入ったところだけ、おもしろそうなところだけをつまみ食いするような感じでやっているのです。もういい加減に背伸びはやめてくれ、消化不良の芝居はたくさんだ、と言いたくなります。

背伸びということでは、このごろ、中学生が高校生向きの脚本を取り上げるのも、けっこう増えてきました。しかし、これについても、感心できる舞台にはあまりお目にかかれないようです。中学から高校というのは、精神的にも肉体的にも非常に大きな変化のある年ごろです。わずか1年か2年のことですが、そこには、乗り越えられない壁があるようです。ですから、わたしなど、中学生が高校生向きの脚本

を上演しているのを見ると、どうも、小さな子どもがだぶだぶの服を着て登場してくるような感じがしてならないのです。皆さんは、そうお感じになりませんか。

### <オーダーメイドの強み>

劇はやりたいが、いい脚本がない。そんなとき、皆さんはどうしますか。

わたしがお勧めしたいのは、みんなで脚本を創ることです。ほんとうに魅力のある舞台は、自分たちの中からしか生まれません。試みに、ここ数年の高校演劇の優秀作を見てみましょう。そのほとんどというより、全部が全部、創作です。これはコンクール形式の結果としてそういうものが選ばれるということも考えられますが、そのどれを見ても、創作の強みを発揮しています。まず、登場人物と演ずる者とが、実にうまくマッチしています。ほんとに当たり役だな、と思わせる人物ばかりです。もちろん、それらのほとんどは、だれか一人（その多くは顧問の先生らしい）が作者として、書き上げたものを上演するということが多いようですが、なかには、みんなで知恵を出し合って創り上げた例もあります。とにかく、高校演劇で全国的に名を上げたいと思ったら、既成の脚本でなく、自分たちの創作で参加するというのが、かなり重要な条件になっているようです。

ぜひ創作に挑戦してみてください。

みんなで劇を創るといって、とても大変なようですが、決してできないことはありません。わたしは、今までの経験からいって、むしろやさしいときえ思っています。

わたしは、40年近くも中学の教師をし、そのほとんどの期間、いろいろな形で演劇にかかわってきました。そして、その中で、生徒と一緒に、あるいは生徒の力を借りて、たくさんの劇を創り、いくつかの賞をいただきました。

まず初めは、1953（昭和28）年、わたしが教師になって、まだ何年にもならないときに創った「赤い羽根」という集団創作劇です。これは、当時始まったばかりの共同募金の街頭募金に、わたしが在籍していた松本市立松本清水中学校の1年生が、募金活動に動員されて街頭に立った経験を劇にしたものですが、できあがった脚本と、その過程や結果についての反省などをまとめた文集が、その年の日本童話会の「劇部会賞」をいただくことになったのです。そのときどんなことをしたかは、おいおい述べることにして、その次に賞をいただいたのもやはり集団創作劇でした。それは、1968（昭和43）年に、飯田市立飯田西中学校で担任していた1年4組の

生徒と一緒に創った「きょうは“0”」です。これは文集にはしませんでした。できあがった脚本やその経過報告によって、日本児童演劇協会の「協会賞」をいただけることになりました。このころは、わたし自身、だいぶ劇のことや集団創作のことがわかってきていて、そのときの記録を見ると、ああこんなこともしたんだなあ、という思い出がいっぱい甦ってきますが、それについてもまた後で申し上げることにしましょう。

### <ぜひとも、集団創作を>

集団創作の強みというものを、わたしがしみじみと感じたのは、1977（昭和52）年から1981（昭和56）年にかけて、飯田市立伊賀良中学校でクラブ員たちといっしょに劇創りをした5年間です。最初の年に創った「いちばん悲しいこと」は、日本演劇教育連盟によって、1987年度の「演劇教育賞」に選ばれました。その5年目の最後の年には、「竜になって」によって「斎田喬賞」をいただくことになりました。この賞は、「竜になって」1作だけではなく、その前に創ったいくつかの作品もその対象になっているようですが、それらはいずれも、クラブ員が考えを出し合ったものを、最後にわたしが筆を執ってまとめただけのもので、わたしがいただいた賞は、すべて生徒の力によったものだということは間違いありません。

だからこそ、わたしは集団の力で劇を創ることをお勧めしたいのです。どうです、皆さんもやってみたいとは思いませんか。もちろん、何もわからないで、めちゃめちゃに創ったところで、いい劇はできません。しかし、ちゃんとした方法にしたがって、一つひとつを積み重ねていけば、必ずいいものができます。

劇をやったという喜びを、単に、劇を上演した、舞台に立った、という喜びだけにとどめないで、自分たちの力でその全部を創り上げたという喜びとして味わいたいと思いませんか。

ほんとうに自分たちの感じていることを、自分の背丈にあわせて、劇にして上演する、この喜びには、何物にも代えられない、永遠の輝きがあります。そして、それによって、自分たち自身も大きく成長するという結果が必ず伴ってきます。

それともう一つ、「そんなことをしている時間がない、そんなことをしていたらとても間に合わない」という心配をお持ちの方に申し上げておきます。時間は充分あります。前にあげた「赤い羽根」も、「きょうは“0”」も、学芸会に出演することに決まっただけの期間は、どちらも1か月ちょっとです。そして、脚本ができあ

がったころには、演技に関しても、もう練習する必要がないほどに進んでいました。よそから脚本を見つけてきて、取り上げた脚本の分析や研究に要する時間、セリフを覚える苦勞など、ほとんど必要ないのです。自分たちが上演しようとしている脚本の隅から隅までわかっている、それが、集団で劇を創りあげるときの、何よりも大きな強みになるのです。

それでは、わたしがこれまでにやってきたことの中から、どうすればいい劇ができるかを、今手元にある資料を見返しながら、できるだけ具体的に、かつ、だれにでもできる方法論的な形で、お伝えしたいと思います。

わたしは長い間、いわゆる「戯曲論」や「劇作法」に関する本を、かなり多く読んできました。たしかに、それによって多くのことを学びましたし、自分が脚本を書くのに役に立ててきました。しかし、それらはすべて作者個人のためのものであって、わたしがこれから書こうとしているような、中学・高校生たちが集団で劇を創ることに触れているものは、皆無と言ってもいいようです。そのことも、わたしがこのようなものをまとめたいと思いついた理由の一つです。

さあ、皆さん、さがすよりも、みんなで劇を創ることを、本気で考えましょう。

#### ◆確認◆

1. 次の戯曲の中で、今までに読んだことのあるものの( )内に、○をつけよう。

- ① ( ) 山本有三 作「ウミヒコ・ヤマヒコ」
- ② ( ) 久保田万太郎 作「王様と道化」
- ③ ( ) 木下順二 作「夕づる」
- ④ ( ) 加藤道夫 作「天邪鬼」
- ⑤ ( ) 石原哲也 作「チェンジ・ザ・ワールド」

#### ◆挑戦◆

2. 上にある戯曲のうち、どれか一編を選んでみんなで読み、次のような観点で話し合おう。

- ① よいと思ったところ。
- ② 印象に残った点。